

県立松戸国際高等学校

目 標

- ・ 生徒の留学等（先進国だけでなく開発途上国も）への関心を高める。
- ・ グローバル人材を育成する。
- ・ 国際理解行事を通して、日本文化の理解へつなげる。

海外理解促進のための講演会

1 海外理解促進のための講演会①

(1) 日 時：平成30年10月15日（月）14時から16時

(2) 会 場：本校多目的室

(3) 講 師：氏名 安藤 ^{めぐみ}愛 氏

所属 元青年海外協力隊員

経歴 大学院を休学し、中学生の頃からの憧れである青年海外協力隊に、「自分に挑戦したい」という気持ちで参加。ベネズエラでは20人の大家族の家にホームステイして、コミュニティーでのワークショップの実施、環境省のイベントの提案や補助を行った。

氏名 ^{かしはら}柏原 庸一 氏

所属 元青年海外協力隊員

経歴 会社員として勤務し、青年海外協力隊員としてミクロネシアに派遣される。現地では道路脇のゴミ拾いなどの啓発活動や水質検査の実施奨励、医療廃棄物分別処理の改善、廃棄物調査及び調査結果を活かした廃棄物管理改善、環境啓発の住民集会の実施などに取り組んだ。

(4) 参加者：第3学年生徒360名、教員20名、 計 380名

(5) 内 容：

- ・ “アミーゴ”の本当の意味 —ベネズエラの地で思う、日本人— （安藤 愛 氏）
- ・ コスラエ島の美しい自然とゴミ （柏原 庸一 氏）

(6) 事前学習：

3年次全体で取り組む国際理解教育兼人権教育として、国際部職員が中心となり、3年次職員と協力して企画・立案した。総合的な学習の時間を活用した。

(7) 事後指導：講義終了後各クラスに戻りアンケートを実施

(8) 参加者の感想等：

- ・ ベネズエラの人たちは自衛のためにいろいろな対策をしていることに驚いた。
- ・ 国によって状況が違うが、なぜそのような状況が生まれるのか歴史や地理の観点から考えてみると面白いだろうなと思った。
- ・ 挨拶や習慣など具体的なお話だったので興味深く聞くことができた。講師の方たちが明るく、飽きることなくお話を楽しめた。

- ・アミーゴという言葉は知っていたが、ベネズエラの現状を知り、深い意味を考えることができた。
- ・現地の人たちとの関わりを知り、今までよりも海外への留学に興味を持った。

2 海外理解促進のための講演会②

(1) 日 時：平成30年10月29日(月) 14時から16時

(2) 会 場：本校多目的室

(3) 講 師：氏名 早川 千晶 氏

所属 ウペボアフリカの風

経歴 ケニア在住30年。キベラスラムのマゴソスクール主宰。世界放浪の旅の後ケニアに定住。ナイロビ最大級のスラム・キベラで孤児・ストリートチルドレン・貧困児童のための駆け込み寺・マゴソスクール、海岸地方ミリティーニ村にジュンバ・ラ・ワトト(子どもの家)を運営している。スラム住民の生活向上のための活動以外に、マサイ民族のコミュニティーと共に行うエコツアーなども手がけている。

(4) 参加者：第1学年生徒361名、教員20名、 計 381名

(5) 内 容：

- ・アフリカの子供たちの状況を知る
- ・現時点で、自分たちのできることについて考える
- ・国際協力・国際貢献について考えを深める

(6) 事前学習：

1年次全体で取り組む国際理解教育として、国際部職員が中心となり、1年次職員と協力して企画・立案した。各クラスの国際交流委員が率先して総合的な学習の時間を活用し交流した。

(7) 事後指導：講義終了後各クラスに戻りアンケートを実施

(8) 参加者の感想等：

- ・今までケニアは名前しか知らなくて、絶対自分とは関わりのない国だろうと思っていたけど、今日の話聴いてもっといろいろ知りたいと思った。
- ・私たちは普段、普通に学校に行っていて学校に行きたくないと思う日さえあるのに、夢が「学校に行くこと」と言うことを聞いて、学校に通っていることにもっとありがたみを持つと思った。
- ・ケニアの子どもたちの現状、自分たちの生活が当たり前ではないということ、本当に人身売買や、そこでの暴力があること、いろいろな現状を知ることができた。
- ・生きていくために諦めずにとっても頑張っていることが分かった。
- ・今私が裕福に生きる中で、アフリカの世界やどこかでは、つらい思いや苦しい思い、生きるか死ぬかの境にいる人がいることを忘れず、すべてのことに一生懸命生きたいと思った。

3 海外理解促進のための講演会③

(1) 日 時：平成30年11月26日(月) 14時から16時

(2) 会 場：2学年各教室

(3) 講師：学生団体 SOAR 大学生 9 名

(4) 参加者：第 2 学年生徒 366 名、教員 20 名、 計 386 名

(5) 内容：ワークショップ「いのちの持ち物検査」

「喪失の疑似体験」を通じて生まれる「自分への気づき」を元にして、難民の人たちの心の痛みに寄り添うために「自分にできることは何か」を考える。

(6) 事前学習：

2 年次全体で取り組む国際理解教育および人権教育として、国際部職員が中心となり、2 年次職員と協力して企画・立案した。各クラスの国際交流委員が率先して総合的な学習の時間を活用して交流した。

(7) 事後指導：ワークショップ終了後アンケートを実施

(8) 参加者の感想等：

- ・自分は時々現状に不満を言ったり、「～したい、～がいい」と自分の欲望を口に出したり、それが通らないと文句を言ったりしていたことをすごく後悔した。自分は恵まれているんだと気づけて良かった。せっかく何不自由なく生きられているから、自分が少しでも社会や世界の役に立てる存在になれるように生きていきたいと思った。
- ・今日、初めて「難民」をテーマにワークショップを受けて、改めて今自分が当たり前だと思って暮らしている環境がどれだけ恵まれて幸せなことかということを実感できた。今まで自分や自分の周りの人・ものに対して無くなったらどうなるかということをしっかり自分に向き合っ
て考えたことがなかったので、今日のこの時間はとても貴重だった。自分がいる環境に感謝の気持ちを忘れず、日本や世界の困っている人たちを少しでも助けられるように目を向けていきたい。

事業の成果

- ・ 本校の生徒は先進国に対する関心は高いがアジア・アフリカなどの開発途上国についての知識は比較的に限られている。今年度の国際理解講座を行い開発途上国への関心が高まった。
- ・ アンケートにも表れたが、国際的な活動に関わりたいという意欲を促進することができた。
- ・ 本校にはアメリカ短期留学とオーストラリア短期留学のプログラムがあるが、このプログラムに参加できなかった生徒も、留学生の話や海外で活躍する講師の話をお聴きすることによって、世界各国の現状を知ることができた。
- ・ アンケート結果にも表れたが、具体的な話を聴き、自分自身の進路と関連付けて考える貴重な体験となった。

今後考えられる新たな取組

- ・ 今年度の講演内容と生徒の感想を精査し、来年度の講師選定を行う。また形式についても、クイズを用意したり、参加する場面を多くする等工夫を加えることで、生徒にとって一層印象に残る講演会にしていく。

